

第七章 結 論

本研究では、条件表現を、順接仮定条件、順接確定条件、逆接仮定条件、逆接確定条件に四分類し、言語形式を中心に、それぞれの条件表現の論理構造の分析を行なった。条件表現の論理構造は、条件表現が発話されうる場面としての、前件と後件との組み合わせのパターンのことであり、条件表現の意味の骨組みを成すものである。

順接仮定条件に用いられる「～バ」「～ト」「～タラ」「～ナラ」「～テモ」は、前件と後件に未知の事柄を持つ。順接確定条件「～カラ」は、前件と後件の両方、またはそのどちらか片方に既知の事柄を持ち、順接確定条件「～バ」「～タラ」は、前件に既知、後件に未知の事柄を持つが、これら「～カラ」「～バ」「～タラ」は、順接仮定条件「 p ナラバ q 」が前提になって推論が行なわれる条件表現である。さらに、反事実的ナラバ文「～バ」「～タラ」「～ナラ」と反事実的テモ文「～テモ」は、既知と関わりのある未知の事柄を前件と後件に持ち、順接確定条件の意味内容が仮定条件の形で現われている。なお、逆接仮定条件に用いられる「～テモ」は、前件と後件に未知の事柄を持ち、順接仮定条件「 p ナラバ q 」の否定の論理構造を持つ。そして、逆接確定条件「～ノニ」「～テモ」は、前件と後件に既知の事柄を持ち、順接仮定条件「 p ナラバ q 」の否定との関連を表わしている。未知の前件を p 、未知の後件を q 、既知の前件を $F(p)$ 、既知の後件を $F(q)$ として、条件表現の論理構造を論理式でまとめると次のようになる。

	順接仮定条件	順接確定条件	逆接仮定条件	逆接確定条件
ト		×		
ナラ	p ⊃ q	(~p ≡ ~q) ∧ F(p) ⇒ F(q)		
タラ		→ "		
バラ	p ≡ q	(p ⊃ q) ∧ F(p) ⇒ q		
		(p ≡ q) ∧ F(p) ⇒ q		
		→ "	×	×
カラ	×	(p ⊃ q) ∧ F(p) ⇒ F(q) (p ≡ q) ∧ F(p) ⇒ F(q) F(p) ∧ F(q) ⇒ (p ⊃ q) F(p) ∧ F(q) ⇒ (p ≡ q) (p ≡ q) ∧ F(q) ⇒ p (p ⊃ q) ∧ F(q) ⇒ p		
テモ	p ⊃ q p ≡ q p ⊥ q	(~p ⊥ q) ∧ F(p) ⇒ F(q)	~ (p ⊃ q)	F(p) ∧ F(q) ≡ ~ (p ⊃ ~q)
ノニ	×	×	×	

上の論理式は、条件表現が発話されうる場面として考えられる、前件と後件の組み合わせをまとめた、いろいろなパターンである。矢印は、表に同じ論理構造を重複して記すことを避けるために用いているものである。それぞれの言語形式は、実線で区切られたマスの論理構造をすべて持っている。例えば、前件と後件が未知の事柄からなる「~バラ」「~ト」「~タラ」「~ナラ」は、「p ⊃ q」と「p ≡ q」の論理構造をともに持ち、前件と後件が未知の事柄からなる「~テモ」は、「p ⊃ q」「p ≡ q」「p ⊥ q」以外に「~ (p ⊃ q)」をも合わせ持っている。ただし、実際の条件表現がどのように解釈されるかは周囲の状況によるものであり、条件表現が元々持っている論理構造と解釈は区別すべきである。ところで、「~カラ」は八つの論理構造を持つが、それらがすべて同じ形の文で現われるわけではなく、実際は、点線で区切られているマスごとに異なる、四種類の文で表わされる。そして、その四つの文がそれぞれ二つの論理構造を持っているのである。点線で区切られている「~タ

ラ「～バ」についても同様の説明ができる。さらに、斜体で示した論理式は、帰納推論によるもので、他の演繹推論とは区別される。

なお、論理式からは、条件表現の意味が一目で分かる利点がある。特に、条件表現の実質的な後件が省略され、他の要素のものが後件の位置に入り込んでいる条件表現も、論理式ではその違いがはっきりと区別づけられる。例えば、「*pナラバ* *r* (カラ *q*)」の *q* の省略された「*pナラバ* *r*」と「*pナラバ* *q*」は同形であることから、一見、同じ論理構造のものかのように思われるが、論理式を見ればその違いは明らかである。「*p* *テモ* *r* (カラ *q*)」における「*p* *テモ* *r*」と「*p* *テモ* *q*」や、「*p* *ノニ* (*q*カラ) *r*」における「*p* *ノニ* *r*」と「*p* *ノニ* *q*」などに関しても同様である。

上の表から、条件表現は、「*p* \supset *q*」「*p* \equiv *q*」「*p* \perp *q*」の論理構造の順接仮定条件がベースになって、順接確定条件、逆接仮定条件、逆接確定条件のすべての条件表現が結び付いていることが分かる。つまり、各条件表現は、順接仮定条件を基本的な軸としてお互い関連付けられ、相互に深い関連を持っているのである。

ただし、条件表現の論理構造の分析と論理式による記述では、異なる言語形式が同じ論理構造を持つ場合の言語形式間の相違は示せない。これに関しては、機会を改めて論じたい。また、本研究の条件表現の枠から外した「夏になれば、よくこの川で泳いだものだ」のような、いわゆる恒常条件や、順接確定条件「～カラ」の文末の「ノ」の有無による論理構造の違いについても今後の課題としたい。